「磯谷さん、あなたいったいやる気あるの?」

「えっ、いや、その……あります……けど」

上司に問いつめられて、なんと答えていいのかわからなかった。すぐそばには、このやりとりに興味津々、聞き耳を立てながら、フェイシャル・マッサージのトレーニングでせっせと両手を動かす同僚たちがいる。

おっちょこちょいだとはわかっていたが、改めて自分の粗忽さを呪わずにはいられなかった。セクシーな友人の力を借りて学長にハンコをもらい、なんとか短大を卒業したまではよかった。が、上京するにあたって一応の生活費を得るためにと、有希はよりによってエステ業界の大手企業に就職してしまったのである。

それにしても、まったくこの会社ときたら、ピンク、ピンク、ピンク。制服もピンクなら、壁もピンク、飾っている花はもちろんピンク。タオル、バスローブ等の備品もピンク、ついでに社員のマニキュアもピンクが規則だ。女性の美を追求するのがエステティックサロンの使命だから、ピンクがイメージカラーとして最適なのはわかる。がしかし、入社してわずか数日で、仕事そのものはピンクとはほど遠いグレーなものだと理解した。

研修期間ゆえに新入社員同士で練習を積んでいくのだが、みんな有希が相手だとわかると、ろこつに嫌な顔をした。

「磯谷さんはしょっちゅう居眠りをする」というのがその理由だった。たしかに顔をいじられているときにすやすや寝息を立てられるのは、誰でも怖い。

実際、有希には眠る時間がなかった。短大２年の夏休み、映画のロケで函館にやってきたジャクソン・ジョーカーの恩田快人と知り合ったのがきっかけで、彼のソロ・プロジェクトにボーカリストとして誘われて。それ以来、連日夜から朝までレコーディングが続いていたのである。

「本当にねえ、あなたの居眠り癖は有名よ。この研修期間でプロのエステティシャンになれるかどうかはっきりするんだから、しっかりしなくちゃ。私みたいになりたいでしょう?」

私みたいに、というのは、幹部になって高給取りになるということだろうか。上司を見ていると、楽しみは部下いびりとショッピングぐらい、淋しいもんだとしか思えなかった。ここでがんばったところで、それが自分に何をもたらすというのだ。

すうっと息を吸った。そして、今まで言いたくて言えなかった言葉をとうとう吐いた。

「私、やめます」

「はあ?」

「この仕事にちっとも向いてると思えないし、やめさせてもらいたいんです」

「あら、そう。だったらいいけど、今まで働いたぶんの給料は出ないわよ。あなた函館から上京したばっかりでしょ? それでもいいの?」

そこには、ある種の嘲りが含まれていた。田舎の小娘がのこのこ東京に出てきて、勝気なばかりに路頭に迷うのだ、というふうな。有希はむっとして、つい言ってしまった。

「私、バンドをやってて、今レコーディングしてるんです。いつか必ず有名になるので、見ててください」

上司は「ばかね」と言いたげに、にやにや笑った。

「磯谷さんてすごいのねえ。じゃあがんばってね」

そう言って、肩を叩いた。

潔くたんかを切ってやめたはいいけれど、実際、お給料をもらえないのは痛かった。彼のアパートに転がり込んだうえ、食べさせてもらうわけにはいかない。彼にしてもバンド活動をしながらのバイト暮らしの身分なのだ。

「まいったなぁ」

自分で蒔いた種に自分でまいる。いつもの有希のパターンだった。でも、気持ちに嘘はつきたくなかった。

海が見たいと思った。東京に来てすぐ行った山下公園から見える海でなく、函館の海が見たいと思った。美しいカーブを描く海岸線と岬の光が懐かしかった。

私鉄の電車に揺られて、渋谷駅に着く。だいぶ慣れたとはいえいつも人込みに一瞬気押される。ときどきふっとしゃがみ込んでしまうこともあった。どこまでも果てしなく広がる函館の空と違って、東京の空はビルがギザギザに切り刻まれて、傷ついているように見えた。

「がんばれ」

東京の空に対してか、自分に対してか、わからないけれど、そうつぶやいていた。